翻弄され、台湾、シナ、朝鮮、シベリア、樺太等との、あまりに愚かな、十五年戦争へと突入していった。昭和十四年、関東軍によって起こされたノモハン事件がその最たるものだ。重装甲、重火器を搭載した数で勝るソ連軍に惨敗した関東軍は、その壊滅的敗戦を国民にひた隠しに隠した。ほとんど失敗の歴史を反省することなく、秘密主義に徹し、対米英戦に突入していく素地を作っている。国家のソロバン勘定を無視し、あまつさえ、統帥権を掌握し続けた超エリート達の暴走とは、一体、何だったのだろうか……。

終戦の年、汪兆銘南京政府の顧問をしていた草野心平は、蔣介石重慶政府に財産を没収される。その頃、二人は思いがけなく再会を果たし、旧交を暖め合っている。日本の敗戦直後、黄瀛は、陸軍特別高級参謀少将の肩書きで、接収業務を担当していたため、多くの日本人を救っている。

一九四九年十月、中華人民共和国成立。内戦は共産党の勝利に終わった。

一九六二(昭和三十七)年三月十七日の朝日新聞学芸欄に次のような記事が載った。

「黄瀛が故郷四川省で重病に苦しんでいる。特異な中国人として、自由に日本語を使い、故高村光太郎氏をはじめ、草野心平、木山捷平氏ら知己の多い人だ。戦後、中共側に捕われて、投獄十二年におよんだ、いま結核とリューマチにおかされ、その日の食物にもこと欠く暮し、収入もいまはまったくなく、再起は危ぶまれている。篤志家の方々の慰問をお願いしたい。……」

文化学院時代の旧友や知己との文通が始まった。それもつかの間、一九六六年には、中国で、文化の名を借りた、毛沢東の文化大革命が吹き荒れる。魂と自由まで踏み躙ってしまう共産革命の空恐ろしいところは、徹底的に歴史伝統を無視し、民衆への洗脳以外にはない。日本との関係が深い黄瀛は、その交友の多さも起因し、辛酸をなめ、再度獄中の人となった。十一年半、獄に繋がれていたが、一九七八年、開放政策のおかげで出獄している。

1

ありとあらゆる
いろっぽいことも
ういもうすいも
えへん
おれは忘れたか、思い出したか

2

人間がひし曲げられた十一年半の
アブノーマル・ライフは仲なか消えない
今でもま夜中ふとカンゴクにいる思いに襲われる
この後遺症はさびしかないか
オレの犯号は一三四だったね
オレはアレから生きのびたかも知れない